



## 岡本弘毅子ども大学水戸理事長に聞く

# 子どもたちに夢の種を

地域の子ども向けに、さまざまな分野の専門家が大学レベルの講義やワークショップを行う「子ども大学」が2014年10月、水戸市で開校した。子ども大学は、02年にドイツの大学で誕生。日本では08年に埼玉県川越市で開校されたのをきっかけに、全国に広がっている。

子ども大学水戸では、高校や大学の施設をキャンパスとして、週末を中心に3月までに計7回の講義を予定。第1期生として入学した小学3年生から中学2年生までの計84人がこれまで、「世界遺産」「ウイリスとその感染確率の求め方」といった学校のカリキュラム内容を超えたテーマの講義を受けてきた。

14年12月に行われた第3回では、一般財団法人リモート・センシング技術センター(東京都港区)の山本彩主任研究員を講師に招き、「衛星かぐやの映像から月と地球を観察してみよう」と題して開催。一方的な説明だけでなく、3D(立体視)メガネを装着し、人工衛星が撮影した月の3次元地形画像を見たり、二つのボールを用いて地球と月の距離感を分かりやすく示したりするなど、好奇心を刺激する工夫がなされた。子どもたちが

らは「月のクレーターにはなぜ偉人の名前を付けるのか」「星は全部で何個あるのか」といった質問も寄せられ、講師が返答に困る場面もあった。運営を担う「NPO法人子ども大学水戸」代表で、同大学の理事長を務める岡本弘毅氏に、活動内容や取り組みに込めた思いなどを聞いた。

### 「違う風」を吹き込む

――開校の経緯は。

子ども大学水戸の現在の副理事長がドイツで仕事をしている時に子ども大学を見て、「これはいい」と感じ、帰国後に開校したのが「子ども大学かわごえ」だった。今では川越市以外にも、さい



受講生にアドバイスする岡本理事長

たま市や神奈川県鎌倉市、群馬県など全国各地に広がってきている。3年ほど前から開校し

ないかと誘われていたが、時間がなく、できないと断っていた。東日本震災の影響が落ち着いてきた時に、自分が運営する民間の学習塾でやりたかったことはまた別に、協力者を募ってやりたいと思ったのが子ども大学だった。

地元の方々の賛同を得るのにそれなりに時間がかかってしまったが、やると決めたら法人登記まで含めて4カ月弱で全て終わり、ありがたかった。開校に当たっては、茨城県と水戸市、ひたちなか市の教育委員会から後援を受けている。

――取り組みに込めた思いは。

学習塾を運営していて感じるのは、受験に合格させるためには、一つの答えを求めて詰め込み教育をしなければいけない側面があるということ。一方、子どもたちは大人になった時に自分で答えを探さなければいけない。教育に携わる人は皆、その矛盾を感じているはずだ。

これを解決できないかと考えた時に、子どもたちに小さな頃から夢を与えて、面白いと感じることができると分野を持たせるようなキャリア教育を行うのがよいのではないかと思った。

今、子どもたちには夢が本当にない。例えば、運営する塾の生徒で大学受験をする子の中には、すぐ頭のいい子がいるが、「将来何をやるの」と聞いても答えが出てこない。東京で暮らしている街には「仕事観」があふれているが、茨城ではそうはいかない。何か違う風を吹き込まない限り、家と学校の往復だけでは夢は見つからないのではないかと考えた。NPOとして、子どもたちが

に夢を与える教育に取り組むことは、最高に面白い。成長していく過程で、その夢が発芽するのではないかと思っている。

### ——講義を担当する専門家選びは。

運営する学習塾でのつながりと、子ども大学かわごえでの活動で培った人脈を活用してお願いしている。まず、本業ありきでNPOの活動をやってるので、われわれと個人的につながりのある人たちに依頼している。運営ノウハウがないので、実際にやりながら内容を組み立てている。第3回の講義では山本主任研究員が子どもたちの質問に対して「私も分からないです」と答える場面があったが、そう言うことがすごい。大人はどうしても知ったかぶりをしてしまいがちだが、全能ではない。大人も子どもと一緒に学び続けることが大切だ。

### ——子ども大学水戸の陣容は。

小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトに携

わった宇宙

航空研究開

発機構

(JAXA)

の的川泰宣

名誉教授に

顧問に就任

してもらい、

昨年10月の

第1回講義

でも講師を



3Dメガネを着けて月の表面の凹凸を見る子どもたち

してもらった。講義後の12月に「はやぶさ2」の打ち上げが成功した際には、後継機のはやぶさを造りたいと話す子もいた。少しずつだが、確実に夢の種がまかれていると感じる。学長は、発達心理学が専門のお茶の水女子大学の内田伸子名誉教授にお願いをした。最終講義では、卒業式と合わせて保護者向けに「親学」と題し講義をしていただく予定となっている。

### ——運営スタッフは。

自分が運営する学習塾に在籍していたり、以前通っていたりした子どもたちを中心に、大学生や高校生にボランティアとして参加してもらっている。7人の大学生には実行委員という肩書を与え、なるべく運営を任せている。社会に出るための準備も兼ねて、当日の議事録作成やタイムスケジュールづくりも担当している。高校生は講義で子どもたちをエスコートする役割を担う。

子どもたちに運営をやらせること自体が、学びの一つになっている。今、子ども大学を受講している中学生が高校生になったときにボランティアとして運営側で参加してもらおうことが理想だ。

### ——県内での子ども大学の設立状況は。

NPO法人が運営主体となつて活動しているのが「子ども大学水戸」と「子ども大学常陸」。この他、県がNPO法人と連携して立ち上げた「いばらき子ども大学」がある。同じ冠を持ちながら取り組んでいる内容はそれぞれ違う。さまざまな形があつて、活動の自由度があまりにも高過ぎることが課題でもあるが、受講者に選んでもらえ

ばいい。

### ■将来は「大学院」も

——講義によって子どもたちにどのような影響を与えたいか。

人が変わることができるのは、環境ときっかけしかないと思っている。外から言われるのではなく、自分で気付いたり、新しい知的好奇心を持つたりするなど、内面から変わっていかないと意味がない。夢の種をまくことが子ども大学の使命。講義での子どもたちの笑顔を見たら、いかに楽しいかが分かると思う。環境ときっかけを提供し続けるNPOでありたい。

### ——今後の展開は。

やり始めたからには、10年ぐらいやらないと形にはならない。なるべく地域の皆さんの賛同を得られるよう運営していきたい。将来的には、中学生から高校2年生くらいまでを対象に、子ども大学の大学院をつくれたらいいと思っている。子ども大学よりさらに専門的な大学レベルの講義をしてもらえるようにし、受講した子どもたちがその講師の大学に行きたいと感じれば、成功と言える。15年度は、武士道や地域の歴史を学ぶ「水戸学」といった講義も開催する予定だ。

【横顔】総合学習塾「弘道学館」をはじめ、3歳から大学受験までを対象に、茨城県内に7教室を展開する「エデュソル」代表。ブロック玩具を教材として使用した幼児教育にも力を入れる。

(植木啓太 水戸支局)